

アナイス・ニンとシュルレアリスム

木村 淳子

I

書くという行為は矛盾に充ちた行為である。自己の内面の真実を吐露しようとしても、⁽¹⁾「現在」を捉えようとしても、書かれるやいなや、書かれたものは人を離れてしまい、⁽²⁾「現在」は過去になってしまう。パリ時代のアナイス・ニンは殊に、この矛盾に悩んだ。周囲の心配にもかかわらず、彼女が日記に没頭したのは、書くという行為の孕むこの矛盾を乗り越えようとしたからに他ならない。『未来の小説』の中でニンは、「近いもの、内奥のもの、直接的なものはひとつの真理を露呈するだろう。隔たり、虚構、構成はまたべつの真理を表現しよう。後者は記憶によって再編成され、小説家によって彼のテーマに合うよう改変されるものである。わたしは偽造されていず、虚構化されていない真理の記録をひとつは欲しかった。後者がわたしのもっとも高く評価したもの、人間との親しい接触を与えてくれるとは信じたことがなかった。⁽¹⁾」と言い、「日記はつねに直接的現在、暖かい、身近かなものをあつかい、白熱のうち書かれるので、生きた瞬間への愛、そして再創造の力は記憶や批判的・知的な観察よりは感覚の内にあることをあきらかにした経験に対する情熱的⁽²⁾反応への愛をはぐくんだ。」と述べている。アナイス・ニンの *carpe diem* は、特に彼女のパリ時代には、日記によってなされた、と言ってよいだろう。そして彼女が、アンドレ・ブルトンの唱えたシュルレアリスム、即ち「心の純粋な自動現象であって、それによって人が

口で述べようと筆記によろうと、また他のどんな方法をとるにせよ、思考の真の働きを表わすものである。それはまた、理性によるいかなる監督も受けず、審美的な、あるいは倫理的な心づかいをまったく離れて行なわれる思考の口述である」に大いに共鳴したのもよく理解できるところである。日記巻1 (1931-34) には、ブルトンの影響を認めて、公言しているような箇所があるし、ブルトンの主張を信じている、と述べている箇所もある。

I have always believed in André Breton's freedom, to write as one thinks, in order and disorder in which one feels and thinks, to follow sensations and absurd correlations of events and images, to trust to the new realms they lead one into.⁽³⁾
 (私はいつも、アンドレ・ブルトンの言う自由、秩序立っていようがまいが、感じた通り、考えた通りに書くこと、感情の動きや、事柄とイメージの奇妙な相関関係に従うこと、そして、それらが導き入れてくれた新しい領域に信頼すること、を信じて来た。) 彼女の処女小説である *House of Incest* は、事柄とイメージの奇妙な結びつきである、夢の記録である。1932年4月の日記には、次のような記述がみられる。

I have written the first two pages of my new book, *House of Incest*, in a surrealist way. I am influenced by transition and Breton and Rimbaud. They give my imagination an opportunity to leap freely.⁽⁴⁾
 (私は、新しい本、『近親相姦の家』の最初の2ページをシュルレアリスムの手法で書いた。私は変化とブルトンとランボーの影響を受けている。彼らは私の想像力が自由にはばたく機会を与えてくれる。)

House of Incest は夢のような、というより、夢を綴り合せて織り上げた作品である。水中での誕生の記憶をまだとどめている無意識の領域を探索しながら、次第に意識の領域に呼び醒まされる過程、自己の中の

他者と他者のうちに認められる自己^{セルフ}、そこから様々な相の下の二元論にひき裂かれようとする自己を、ひとつにまとめて、そのアイデンティティを確立しようとする努力、がこの散文詩、*House of Incest* の中に見られる。同時進行的に描かれる、サビーナとジャンヌの生は、とりもなおさず「私」の感覚の世界に同化し、「私」はサビーナとジャンヌと分かちがたくなってしまう。*House of Incest* の主要なテーマは、愛の諸相である。親子・兄弟姉妹・異性間の愛の諸相は、その後のニンの小説の中に発展して行くものである。処女作が作家のその後を暗示する、という指摘は、アナイス・ニンの場合にも正しいように思われる。サビーナは同じ名前を持つ、『愛の家のスパイ』の主人公サビーナと、彼女の愛の相に通じるものを持つし、ジャンヌの愛のかたちに、私たちは『ガラスの鐘の下に』⁽⁵⁾のジャンヌ、即ち何よりも弟達との幼年期の愛を至上の愛とするジャンヌのかたどりを見る。それから、ヘジャや、レナーテやその他の登場人物達に重なるものを見る。これらの姿は「私」の夢の現実化であるとともに、私たちの夢の現実化であるかもしれない。つまり人がその内面の世界の奥底に抱く無意識の世界の顕現である。「散文詩で始め、それだけが無意識を表現出来ると感じたわたしは、もはや、伝統的な意味でのごてごてと装飾を施した小説、必らずしも内奥のドラマの一部ではない、物とか場所の描写でゴッタがえし、詰め込まれた小説を書けないように思えた。わたしたちを自分の感情という潜在意識のドラマのより奥深くまで導き、そして、現実とはわたしたちが感じるものであって、わたしたちが眼にするものではないというタルムードの言葉に到るためには、ある種の抽出と非本質的なものを捨て去ることが必要であるようにわたしは感じたのである。」とアナイス・ニンは、『近親相姦の家』日本語版への序文で述べている。

II

House of Incest の成立の過程を日記の中で追って行く時、私たちは興味深い二つの交友関係に遭遇する。一つはヘンリー・ミラーと妻のジューンとの交友であり、もう一つはシュルレアリストとして異色の存在であった、アントナン・アルトーとの交友である。ヘンリー・ミラーとの交友については、写真家でもあるブラッサイの『作家の誕生』のなかに詳しい。⁽⁶⁾ ミラーとニン、この二人の全くタイプのちがう若い作家達は、互いに磨きあって、それぞれの文学の世界を確立して行った。再びニンの言葉を借りるなら、『近親相姦の家』は、その発端をユングの《夢から外部へ出る》という言葉から得た。1930年代、パリでのことであるが、ヘンリー・ミラーとわたしは様々な夢の記録をつくることを始めたのだった。ふたりは、その夢を織り合わせ、ミラーは彼のものを『夜の生のさ中へ』⁽⁷⁾ と呼び、わたしは自分の記録を『近親相姦の家』と呼んだ。『近親相姦の家』は、……実際の夢によって構成されたのである。夢というものが、創作的な能力や即席に書きつけることや展開を与えることの鍵であった。⁽⁸⁾ ということである。アナイスは、書き上った原稿をヘンリーに見せた。ヘンリーは手紙を寄こして、素晴らしいと言ってくれたが、アナイスは、彼が抽象化され、無駄なものをこそげ落したこの散文詩を、理解できたのだろうか、と思う。「ジューン、僕は君をモデルにして、君が好むような、素晴らしい人物を創るよ。」とヘンリーが言った。「でも、『近親相姦の家』のような詩はいやよ。私、あれは理解できなかった。私はあんなのはだめ。」とジューンが答えたことがあったのだ。ジューンはヘンリー・ミラーの後を追って、ニューヨークからパリにやって来ていた。大柄で個性的なジューンは、アナイス・ニンとは対象的な女性であったという。

アナイス・ニンがアントナン・アルトーにはじめて会ったのは、精神

分析医のアランディ博士のところであった。1933年の3月には、アランディ博士と共に、ルヴシェンヌのニンの邸宅を訪れている。「神経が張りつめた、やせた男、やつれた顔に眼は幻影を追うているような。冷笑的な態度で、今疲労しきっているかと思えば、次にははげしく悪意に満ちた態度を取る」⁽⁹⁾ アントナン・アルトールは、その後親しみの度合いを増して、ニンの許を訪れるようになり、金銭上の援助や、忠言を求めた。このような二人の関係は、アルトールのニンへの11通の手紙にも詳らかに⁽¹⁰⁾ある。ニンが彼に贈った小切手に対しての感謝の言葉が見つけれられるが、彼のほうは彼女に知的な、文学的な面で数々の影響を与えたようである。彼女のほうは、彼を文学上の理解者、指導者と考えて、*House of Incest* の原稿を読ませ、感想を求めた。アルトールは、自分は英語が得意ではない、と言いつつも、次のような手紙を書いている。

One thing amazes me, judging from the manuscript which you gave me, *House of Incest*, you seem to have an awareness of subtle states, almost secret ones, which I have only felt at the cost of enormous nervous suffering which I did not seek out. I am very curious to know by what science you reach the core of psychic states.⁽¹¹⁾ (あなたが私に下さった『近親相姦の家』の原稿を読んで、一つ驚いたことがあります。あなたは、ほとんどすっかり隠されていて、感じとるのが難しい心の状態を、感じとることができるよう思われます。私には、その根を見つけ出せないような、非常に大きな神経の痛みなしには感じとれないような、心の状態です。どのような術によって、あなたが心理の中核に到るのか、とても知りたいと思います。)

ジャン・ルイ・ブローの『アメトナン・アルトール』⁽¹²⁾によると、「アルトールはアナイスに大きな引力を及ぼし、彼女は時々彼に、彼の複雑な感情にごく近いと感じたほどだった。彼を理解し、称賛した。」とある。互

いに同質のものを持っていたらしいことは、アランディ博士の言葉からもうかがわれる。

You remind me of Antonin Artaud, only he is fierce and angry, and I cannot help him. (あなたを見ていると、アントナン・アルトーを思い出すよ、ただ、彼は激しくて怒りっぽいので、私にはどうしようもないのだが。)

House of Incest が出版されたのは1936年であった。シュルレアリスト達との交友の中で育かれた夢は、アナイス・ニンの処女小説となって、外界に生まれ出たのであった。

III

西欧世界の歴史は、人間解放の歴史として捉えることができる。歴史上の各々の時代に即した人間解放の思想がおこり、それは科学思想の発展に寄興して来た。また、反対に科学の進歩発展によって、人間解放の思想が新しい展開を見せてくれるものでもある。20世紀の30年代に興ったシュルレアリスムの運動も、これら人間解放の運動・思想の表れの一つと見ることができる。このことは、今後、より大きな時間的距離を取って眺められるとき、一そう明確になるのではなからうか。シュルレアリスムが、他の時代の人間解放の思想と大きくちがっているのは、それがフロイト学派による心理学的な人間像に根ざしていることである。夢は、目に見えぬ極限によって、がんじがらめにされている人間の願望、欲望のあらわれである、というフロイトの『夢判断』を引き合いに出すまでもなく、抑圧された欲望を正しく知ることによって、人間の行動、また人間そのものを、正しく理解することができる。アナイス・ニンはフロイト学派の流れを汲むアランディ博士やランク博士を通じて、精神分析に強く興味を惹かれ、さらにシュルレアリスムへと惹きつけられて行った、と思われる。しかも、彼女の取ったこの方向は、それより以前にす

でに彼女のうちに芽生えていた一つの傾向として推測されるものであった。

1932年にニンは、*D. H. Lawrence: An Unprofessional Study* と題する D. H. ロレンス論を書いている。それは分析的な精神の上に立った研究論文ではなくて、⁽¹⁴⁾ニンの鋭い直感と洞察力によって透視されたロレンスの世界である。身体じゅうのすべての器官・感覚を十分に働かせて生きることを至高の目的とするロレンスの世界の探索には、ニンのこの方法は又とない方法であったように思われる。

Lawrence approaches his characters not in a state of intellectual lucidity but in one of intuitional reasoning. His observation is not through the eyes but through the central physical vision—or instinct. His analysis is not one of the mind alone, but of the senses. ⁽¹⁴⁾(ロレンスは彼の創り出した人物にアプローチするのに、知的な明快さではなく、直感的な判断力によっている。彼は観察するのに、肉眼をもってするのではなく、身体を中心にある視覚—或いは直感力—をもってする。彼の行なう分析は、精神のみならず感覚の分析でもある。)

ロレンスは生れつき宗教的な人間である、とアナイス・ニンは言う。『生命性』“livingness”を至上最高とする宗教である、と言う。キリストの受難は復活によって意義あるものとなるのであり、しかもそれは、クレドの中で唱えられる通りに、肉体の復活なのである。霊と肉が共に生きることが、復活の意味するところであり、キリストの贖罪によって救済された人間達の生は、とりもなおさず、復活後の生である。作家としてのロレンスの仕事は、人間の復活の仕事である、とニンは言う。(So here is Lawrence himself at his work of resurrection, the work ⁽¹⁵⁾he loves.)

ニスがD. H. ロレンスの文学に惹かれるのは、彼が霊肉一如の完全

な人間を創造しようとしたからであろう。ロレンスの世界に入っていくためには、「知性、想像力、身体三重の欲求がなければならない」。なぜならそこは、人間そのものと同じく、「混沌」の世界だからである。ニンは言う。「彼はわたしに深い影響をおよぼした。彼は本能、直感を源泉として創作していた。彼は関係を描くのに魅惑的な方法を開拓した。わたしは彼が、さらに発展させ、先へすすめることができるようなひとつのヴィジョンへの道を開拓したのだ、と感じた。彼は意識と無意識、情緒と感覚を融合させた。」⁽¹⁶⁾ロレンスの世界の認識は、生きた瞬間、即ち現在をとらえ、無意識のうちにある真実をとらえようと努力する彼女に一つの啓示とも言うべき、閃きを与えてくれた。彼女は「日記」が、生きた瞬間をいっばいに詰めこんだ宝庫であることに気づいたのだった。「生きた瞬間」、それは、可視の世界の向う側を見直す瞬間のことである。詩人たちの多くが、目に見えぬ真実を見る。シュルレアリスト達の自動記述もまた、現実を超えた向うを見直すための努力の一つである。ロレンスの世界に共感を持ったニンが、ブルトンの主張に共感を感じたのは、当然のことであっただろう。

IV

André Breton came to visit me. I expected he would be poetically and sensitively alert to the atmosphere of my life, to my inarticulate intuitions. He was not. He was intellectual. He talked about ideas, not impressions or sensations.⁽¹⁷⁾ (アンドレ・ブルトンが私を訪ねて来た。私の生活の雰囲気、あいまいな私の直感等に、彼は詩的に感覚的に反応するであろうと思っていたが、そうではなかった。彼は知的で、印象や感情の動きについてではなく、思想について話した。)

これは1947年秋の日記の一節である。この時、ブルトンはニンに或る

エピソードを語った。即ち、或る婦人がブルトンに手紙を寄こして、二人きりで会いたいと言って来た。場所は、ポン・ロワヤルの下、時刻は真夜中、ということである。ブルトンはこれを畏かも知れないと考えて行かなかった。二度目に手紙が来た時、彼は供を二人連れて出かけた。橋の両端に立たせて、事のあった時援軍にしようと思ったのである。この話と、ブルトンが音楽ぎらいだということを知ったことで、ニンはそれまで抱いていたシュルレアリスト達に対する気持を変えてしまった。彼女はシュルレアリスト達の唱えるところには共感を感じながら、彼等がそれを実践していないことに不満を感じる。「私はシュルレアリストのグループには入らない、と考えるのは、彼等が、人生や芸術に、イメージや自由な連想、或いはシュルレアリストの要素を見出すだけで満足しているのに対して、もう一段深いところに達したい、と私が望むところにある。私は無意識の意味するものを解きあかし、我々の人生を、肥沃な、限らない豊かさのうちに、調和的に生きるために、無意識を意識の次元に持ち込みたいと思った。」⁽¹⁸⁾と、1942年冬の日記に書いている。これはシュルレアリストの画家であり、作家であるレオノーラ・カリントンの、絵を描くための、物を書くためのイメージが涸渇してしまうのではないかというおそれに対するコメントの一部として書かれているものである。

現在のシュルレアリスム研究では、シュルレアリスムとは、社会的文化的拘束から人間を解放する一方法である、ということのようであり、またシュルレアリスムは何よりも実践されなければならないもののものである。無意識の領域の探索によって自己を解放すること、が、今日シュルレアリスムの目的としているところであるとすれば、「調和的に生きるために、無意識を意識の次元に持ち込」もうとするニンの目的と、一つになるのではなからうか。

— 註 —

- (1) 『未来の小説』アナイス・ニン, 柄谷真佐子訳, 晶文社。
- (2) *ibid.*
- (3) *The Diary of Anaïs Nin*, vol I, Harcourt, Brace & World.
- (4) *ibid.*
- (5) *Under a Glass Bell*, by Anaïs Nin, The Swallow Press, Chicago.
- (6) 『作家の誕生—ヘンリー・ミラー』, ブラッサイ, 飯島・釜山共訳, みすず書房。
- (7) 後に改題されて, *Black Spring* として出版された。
- (8) 『近親相姦の家』ニン, 菅原孝雄訳, の序文より。
- (9) *The Diary of Anaïs Nin*, vol I, Harcourt, Brace & World.
- (10) 『テル・ケル』誌20号, 1965年冬季号。邦訳は, *Au-delà : 403 vie*, No. 2, 鳥影社刊, 参照。
- (11) *The Diary of Anaïs Nin*, vol I, Harcourt, Brace & World.
- (12) 『アントナン・アルトー』, ジャン=ルイ・ブロー, 安堂信也訳, 白水社
- (13) *The Diary of Anaïs Nin*, vol I, Harcourt, Brace & World.
- (14) *D. H. Lawrence : An Unprofessional Study*, by Anaïs Nin, The Swallow Press, Chicago
- (15) *ibid.*
- (16) 『未来の小説』アナイス・ニン, 柄谷真佐子訳, 晶文社
- (17) *The Diary of Anaïs Nin*, vol. II, Harcourt, Brace & World.
- (18) *The Diary of Anaïs Nin*, vol. III Harcourt, Brace & World.